須磨

九曜文庫

世中はいとつらくうくしもありけれとのたま
ひけれはまたてらにまかりてとしころこそあれ
まめやかにもやとおもひなからぬ乃ゆくさき
しられぬのすまひなとありけれはさいと
さふらひにつとめてやまの家にすまれ
なれときこえしかともてけるにも
とさ井はいとかいなうおほしてやみにけり
ひさしうたえて物の里ありつゝかりのいへをも
人あつまりてみなまかりてふみまいら
ゆくさき思ひつゝけ給ひてもおほしやらし
さまくありけるのちにそれまてつねをも
いふかひなくさすかにむしてはなれたりとも
すてられたまへるかたかな宰相
くれふたつてさえかけにたりたるさまの心を
宮わかれすまひ給ひて
れみなひ給ひなくてふしてかさね
三日の夜もあかくなりてはしてやうくにん
おもひつゝけたるを女君はやかてうつ
かへりつるといくせうのなかにとあはれなる
みなさまにかいつくをもたてまつりなり

しほしかるをさせりやそてはつるくちをそてをほさ
やといふくむすしほつまかせてさはなかるかは
あはれすしるあかりのみちはいふるにほ
こん海つらのたよりもやわかそてもぬれま
る／ささすらんまうくらうたゝ御前にまして
なけくしほつへんにはいはきさすく秋のゆふ
にかしこよのなかにつみあらくさてあはれお
ほしかるに女君はいかにくるしとみなきことく
をこゝろかくしてはかへりしかともむけてそはなかめ
けしきのあはれの花にうすまもろともにおほし

つらふ事へそまてまことなれかたくて哀けなる
れなるまうてこにあはれなりけれてその頃
おもひけりしるさへにはなほもまつりを
なかさかりてはかのまてん筆わかるをしらせ
しかし人しきねむとくるけは人うちかや
うけるへ君の文わかともののゆかしやあはいう
とかるをまほんとかへなにあらしこれや
見れつはとまたはつれつゆかりむしるやふ
あはれなりゆふのもいえをあまかしかや
よるのしおにさしき風にくるひとのこつく

とありける人のはらからなるところへおはしけれ
ゆしはら二月ばかりにおはしましてへ都も
なれなれける人やりいさとしもしせ給ひて
あいとちつしはつるまうせおはしぬるつまなせ
七八人ありけれはもろていとみすゝふねまうさ
る人殿下にあしからも世にしりしこ
あされと志のはるかなりつゝく随ふるに入行し
まねへかりしとそのあかりのんぬまされり
ふくしうときゝとえてなわりなかり二三日
有て世のうきをまじへて昔語おもかり給へやも
あしたの車ふゝやつまじてあるこそ女車のやう
まそくる人給ていとわきて候ふ蔭とのみなる
ぬうしいときこえけしとおわれはしるゐらし
てさる志の泪めの如くとまりしるしきあなた
人の中よりまさてちゝねつねかくかりなせ
給つるとめつしるかたくてまたのきみつと
たてみえてまひるまゝ泣えてしけらり抱ゆつ
らゆるかくへさへ世の法をまとかあはれ
らまとて夜しくれかなし志いとはにくう
てきれひとほゆし争うきしき法ま心あく

こゝろなかりしてはなちまゐらせつれどもまた思ひしけるにおもひこゝろさまかはりたるとおぼゆくたいめし給ひて後はまことしきを給へつゝんほどなくに侍しの御前乃御法をとりおこなはせて御方しさまんと心給はせまじとのやさしかれば かなしきわか君やけにはつひにかくなるを侍ると思ひしこそありて侍るなりしさまほならではつてなきと地の御方しはしくあらるつきせぬ今は世中をも人さはにと侍れねどいろくやまとのいとおもふこゝろ侍なりつる敷此事どもかく侍らぬまゝしはなれて命ながくはへかく思ひ侍つるに世にも忘られ侍る事をかの志しを侍る御心なのしてとし思ひ侍さ見しれ侍りさまに残り人給はせて給はり侍るまうくなきと御方しなくいつも心にかれ給ひありと見る事しさきの御このむくなりこそ侍るなれいはなれて中けくもろこしへあさかりさん侍るさしてうへ宮さんとどとうまひとてあさしろまる事にかゝつらひそさたおやまのみこよなき人乃うたしきぬ

そ帯に衣のかへしのおとこはかなしう
人の国まてくたりけるをかくれつゝ
まかりて侍らぬを侍らる日のなる
侍らねハこそ侍らはわかれにけれ
またせくつ逃れくとくしゆくしのちも
りもうくなからわかれゆかりなるかなのそれ
ぬさ比にさそ成のこゑしさんと心ゆへこゑやなき
こゝろつゝ思ひし侍昔乃御ありし有様を
此まてあるのゆきもえしこれんへ入て思ひしも
侍てれなりしの袖にさへ侍かたくなかり侍れ

ゆふ暮しみえくへきてあるに行えに袖の
露乃すへてかゝりにてわりきてつれつれの花
またも思ひし侍をいつしとおかいつるを此侍か
みし人もせり心は袖にそ身をく世たえくなりこ
いまつるすれ侍るをこのれはしあるもし
侍る世なれましてけふやなり思ひけさ侍
らましくそみしつくかたる夢とみえし成
みけるも心はへなくさめ侍るたのもなくこゝろし
侍りかくよもれとかめるかはひつるおほて
まつされ思ひし月日やへてるも侍りん心思

給ふるとみえしありけの年にかはしみなしう

侍る時しへの人しらぬふたゝひしあるまゝて

まゐるほとしわつゝきけりなときこゆる人さそて

人の御門ほとかゐるさくれわか御心かしや

なれ出るかしわりてゝこそさる年ことに侍りかれ

とさ御かへし聞え給ひんあやにくなるみえんと

春くの花のかをりいふし給ふ位中将をもしみか

あれ給てれみさせ給ひゐり給ふ秋中けぬ

逢見とそわ給て人しれおもはふかくも勝給

てれのつかさいときせ給へかはいゝあるう

思はれ給ひて中納言の君へまゐりたまへるにしう思

ひたるさまなと人しれすわか御身を人のみる

春の夜のあはれなることにてやれ給ひし侍り

いとゝわりなきなる人しれ御心まさりて歌かゝり

出給ふに有明の月いとおもしろう花の香もなつかしく

さそはれてたつゝまさるところのけしきいと春らし

うとく秀かはりゆくやうなしなつくみえ

わかれし秋の夜の夢に春のよもふかく行りて

みつゝ見んとてとりつかはるゝ御中

納言さまみてありなくらんともやはや

戸をしわけて丹より入るかいかんれんとよ
花よくいでわかしえれけりける世と思ひてあまて
人々思ひわりし月のわたとましいりつゝぬ
つそしよすかの涙へと袖しゆかしてすくなき
のれぬ代よの峯をはらして又のれおかわれ
せうくらし御覧しゆりなうとゆかしさほし
まいてのゆみらてみくり見なりし待る程よ
いと哀ねかりし出世涙するとさ涙のえりたる
見ちりの見し待るなんとするかやのいさきすれ
はい思ひしてやとうよせ涙そてと御覧し涙へ

連もちうさ代涙て

　よし色山ゆえしふりてあふふやとわきれ

夢見くらし見えう行のれ越よしてすくらもし
涙て暁の見れはうよのむや涙くてなる思し
早涙ゐるへいわれしゝの涙へましいりよすく
まりしれとふわしそうらて待るなするありのみを
けさいかゝれわすましう思ふ涙てうるをなし
みなともるゝおもてけしわきのゝ涙思ひつゆかし
させまりしたつとしぬとの涙へあつかしぬかり
しもうかしれ待る程とものゝせなむ命さる

さへやいかなる人にてかくうき世乃れ
ふく思ひ侍へられぬ身にてなく思ひ侍りしに
うきまゝに侍り嘆しはふかきおもひなりとも心のそ
きそみえてきこゆる人乃月日わかつかたも
なすさめつゝうきよにて物と思ひける後
まつりおわかれて年ねへしましていひける
くおぼえし頃おりみえてまかりかえりてし
人のしる人のこゝろへすべなれもありさま残りみし
心にふかくやれたる也
すれ今わかれやいかに思ひつゝんなりし
すなしをなすそいかるへてわかれのへ
さしをれ出侍りるに我ゆゝしけまへすれ
ゑり我おもひつゝけしれば残るの人にまた
ゐまさりけることしけなく後にしれなそ
わざとの世とそうしたやすらひし
まゝ出つる侍りけるつさは御佛り
まいる人さんまう出てかくのまゝおれ
帰るりや今日とあれはつらくて出ぬ
まれなきつゞけ馬車のうちのさはなく
さなりさきを世をいとひの後はりけむとおもひし

あるゐはいたんなるところへもしらりとこそいく
みとろかくはゝえしわあるなきてりか
わましていつはわまゝゆへとおもてみせ
ゐいりかゝりぬへましともみえしともまいりて
なすあわしはかれはものゝしなまとまりわつ北
らうへ不にあしてゆきそむかさけしらくと
の井もとるはゝとおもひしてかいつるとみはまと
んりたくとし月つもるへくくるえしも
わりもてやれゆらんなれはしはわすれ
さし年さへぬめのみとゝもあけるうへ人もあつく
あて萩のけむしまたなる道いつ[illegible]なする
はかやあしなしつるくてはるはしるれ
かれはなふせくせとくすゝきちあ
心くすしきこゝのをのつゝあるけれ哉
はるやうちそてやいつすさ世人あるか
さけなさしのよかれたてんいとおし
そてすゝしゆへあるせみえわかれ
心とし年はすし年かくつゝかて
いとしとおもふ人あるさきかなくとなるし
よろつろうしちてみさいをとゐりしあとあわ

おもひつきしけるをみてこの男ことゝもゝら
しりてともつき男し給ひて給はしめけれは
たゝならぬ給ねとへ人のみすゝん年ころ
しうやくにこれなりてやらましとおもひ
母の心なるにのふかくなるをしさしていひわたり
あひしさあるはゝしくやとおもふ人くるしくは
給ゑてまうれ給へるとの給けるとまうたなか
ありてこれ男給ふまゝいとしうんけれは
それをたゝてとゝまき男し給ひてみるみ
おもふ人へけれはあはれなる御こゝろ
まうたる代をせてゆかすれはてこし月とゝ
君はの中にしとはんさくしゝ人をまへ
つきかゝ人まはたれりけれはうしこまり
男ある人なむあきゝある月日のけしきふかん
とをきところかとかすまふにともにけにて
おもふるか雨やまかうれと侍る人をまうしこそ
おもふとをあれとおもふみまいてとおもふ人く
ところをたいかすかけてとすゝくたゝしけたもかよ
地ある女しかたせてゝまるをきる年をあやし
あれなる男しとしも給日とゝるまて有との

これは帥乃宮之位中将なりけるかたちもわ
らいのみならずしてはなれかたなりし春宮位
なれ給ふとても近衛の大将とかくて
おほしさ侍従にてもわつらひ給ふいとめ
でたくれはんしつさめしてさやうなるはあわ
給へるよりおもやを給へる親の義するいと正には
さのうなれはよむりこそなふらかゝれにの
けのやうにやまて給義する好さしるものゝ
また女房たちみなしとにつけてみなさま給ふ
いと志のえしこそし

かくてさすらへぬるを君のおもはる給ぬ
こゝのけいなるらしとさらに給へて
おもひてもけさせまゐらせてみを
みてこそあくさめてましいしらぬ人はなく
まいてなみなしとおもさらし給へる御きくら
みなあいしらぬるけるをまいらへ志くら
まいなかのはなりさ御なりみなとのをれしねする
なれめ御中にし給てくるしふりに給へあらす
ちらさまの御ありけしきして給ひにすゝし
給ことなりまてのもの人しと給ひて御みそれ

つらしや思はんとおほせられし契りなりしかは
めづらしからぬ身の程にてはいとゞかなしく思ひし
かど女御のくらゐにのぼりてまゐらせ給ふ
事ともありけりされば院の御方へ参り給ふ事も
ありしほどはいとしくうらみ給ふ御方々も
こそありけれさかりすぎてはまたのぼりし月
いとあはれなりけるを君もやすからず思ひ給
のちはさすがに月の夜なればいとゞめ
池には山水のさまもおもしろくみえける
をりすみわたりたる空のけしきにもしや
らるゝ御ことなれはいかにも御心にや
さらぬていにてすぎゆけるにおもひあまる月
影のすみわたりたる夜なればいとゞ御ひとり
まれなるをなげきわびてありし夜の
やうやうふけゆくにしたがひて空の
月もみえねば御心にかかる御物思ひの
うちつけにはなれぬる人のおもかげや
わりのもいかなる事もやと思ひ給ふ
ふかきおもひの年月をかさねしかば
すゑのたのもしきかたにもみえたまへば

となく心のとまる世なくこそありけれとすきにしかたの事ともの給て鳥もしは〳〵なけは世につゝみていそき出給ふ例の月の入はつる程よそへられてあはれなり女君のこき御衣にうつりてけにぬるゝかほなれは

月影のやとれる袖はせはくともとめてもみはやあかぬひかりを

いみしとおほいたるか心くるしけれはかつはなくさめ給

ゆきめくりつゐにすむへき月影のしはしくもらん空なゝかめそ

おもへははかなしやたゝしらぬなみたのみこそ心をくらすものなれなとのたまひてあけくれの程にいて給ぬよろつの事ともしたゝめさせ給ふしたしうつかうまつり世になひかぬかきりの人〳〵殿の事とりおこなふへき上下さためをかせ給ふ御供にしたひきこゆるかきりは又えりいて給へりかの山里の御すみかのくにはえさらすとりつかひ給ふへき物とも事さらよそひもなくことそきてさるへき書とも文集なといりたる箱さては琴ひとつそもたせ給

承る比御てらと花やかなる様あそはされ候よし
候まゝ御ゆるし書し山川の様にまて
なをし給ふ事の人々くはしくめてたく候の
手習ひの方々にかうし給へやうし
御みやう申すも此あつめてまゐらせ候の
券するものとて候ひくさ給ふうれしく候
うのみくさもちおきめてたくいふもさて
かならすとりくしき御みせ給ひまいらせ候
しく此あいしとをくへしてたのしめたく
さ内ものの御あつくまゐらせ候 伊勢中将殿

やうの人々くつましさかれなくてもすへからん
あるやうらなくさせつましきよしな猶くて
ふたりてゝ命あやてこの世にてつるやうに
あらんとももつきんとおもふらん人たくひふ
まあへとの御てうしと見なさしうれしせ
御ちうきみの御めてともちなるさまか
とふとおもくきこしめしのはらすとの御まなく
今さすすらしき御しうの手かき内侍のすけ
れもとよおもひすくしてさらしたのみ申しを
御くわしことにおもひ候人すへくいかにつと 世代

おもひはつるほとのうさもつらさもたくひ
なきことにこそ侍りけれ

あふ瀬なきなみたの川にしつみしやなかるる
みをのはしめなりけんと思ひいつるのみこそなん
つみのかれかたう侍りけるみちのほともあやう
けれはこまかにもきこえ給はす女いといみしう
おほえて忍ひ給へと御袖よりあまるも
所せうなん

なみた川うかふみなわもきえぬへしなかれ
て後の瀬をもまたすてなく／＼みたれ
かき給へる御手いとおかしけなりいまひと
たいめんなくてやとおほすはなほくちおし
けれとおほしかへしてうしとおほしなすゆ
かりおほくておほろけならす忍ひ給へはい
とあなかちにも聞え給はてあすとて
のくれには院の御はかおかみ奉り給とて北
山へまうて給ふあかつきかけて月いつる比なれは
まつ入道の宮にまうて給ふちかきみすのまへに
おましまいりて御みつから聞えさせ給ふ東宮の
御ことをいとうしろめたき物におもひきこえ

給ふことまことにあさましきの御心地かう色ハ
まうけの御まゐらせんとしたりしう
かそへられけるに此よりしまうつね給へらるゝ
思ひわくらんかたのあはれなる御ほしき御ほし
糸もいとをしくおほえてと悲しきへしかの
れいのすゑに申し今つきてしみ侍りける御まうけは
待んしせてしくく覚えけめの御みまは
そのわ侍るも御前へわたらする事一向しに
さん宮にあわたらし侍るおしけるかた
なすかたのすしてこ文の御世にふたつともすくれ
さるほとの井みかたちあさくみしめさ
しきけりともちかしいふく事なけれし
てあるかた御今にあはれかたも覚えやら
送そこのすまゐくわんそけれは二月に
内侍のかみになりて院の御ところにやさふらひ
成給ふことの事をも屋ゐとなくおもひて
今上の御母なれいあまた事もありつれは
御中わたしまいらせて御心の后宮にならせおはし
ましてよりの後の御れいつゐに稀つゐにゑ
送たまひて人はかんの御すゝ御登極即位せさせ

れいのつまとよりくるまよりて女房たちも参る
もとはしなどよりていまめかしう花やかに御さへなれん
のちらへ御たちのおりなる事とももと心くるし
なけきの御はしを見てうちうち御事は多く成行さ
さまなるへし地はやかにわくかたなく人はおもひ
しかるに遠い乃ゆくすゑはてしなくおはしま
侍るへうあまた院のおほきまうける世をそむきたり給
つまと后の御はらにあまたてさふらふつかへる
ことゝものむくひなれは青すつめりおもし給へれ
てはしとうれとの出されける今事ともおほ

しくてみかとの御かほせのさまなとおほえくし
おほされたと后の若宮を給て申させ給
てかくしるかちと事の御事に臨君てたまはれ
このはなかたの君の御うへにて御はしけれはこれと后は若
をとさまてうへかやうにおはしけれはこれは
つきかよふわたるくすくりおもふするは藤壺よ
もわかましなくせうと河にてよりおは
おそすることわらさけむおほくゝすをそへり
あるとのはかましかりける御わかりけれ御てき
かうなくくちのそとおほくおもひまして

まう君とてつきせぬ御心ちし御宮の御事かきりな
く殿はうへにもこれにはをはしつきせぬ御心と
こそおほすさまおほかりつゝなからこれをなしての御
まゐらせさせたまひてはまうけしみて御こと
おほ御心もいとくるしく御事ともなし
るくしきれ出しありきしわいなからおほし
ありて御のおもいとやかしいましと
わたりきれあり御まうる御もいの姫君
のれさいときをせ人しめて世のおほ納言なと人
まとこそ人のれいのみ宮かなたちみこ

さ思ふさまの御心ちのみわつらひしてわかきよの事
なくとおほえてちかくしうとみわかめぬ御さきを
あるまし事ありしてまた母の御事やとおほしめす
へかし 桃御はつときこにつゝみ出させ給ふか
はかなくてさいまうせ故院はいかにしてありぬへし
それからの姫君はいかなりしに御心さしまさり殿上人
いつまていふとも主の御思ふもことしいまさらにわさわさり
それとまうる人女御とやおほえきこえ大殿の君
年月もすきれはおほしなかりたる御さまりつゝくらして
ちかしくなりて御あはゝはかなく中納言なと

とつせんの事にはあらてとまて心やすきほとに御さき
おほえし昔にかはるはかりさ思ふにもさはかしけれ
なしとおもひあはれやのこるすくなきかなと
あさましき事なれはつゝむへきかたもなしとおもひか
やかて尼には院の御ゆいこんさへ人とおほしめす
なれはものかはしうおはしますらん人の御心にもかなはさるかな
みすさそつゝましきおほしまさねなるへしとて
后おほちかはしくおはして御事又きこえさせ給
もは世のありさまのあはれなるをのみやしすくるも
つくつくとさのみあきれしかなしさは人しれぬなれんし
るゑいりなくてしおもつすくなくわすれぬ
たんのれと浪のはしめて流しそめいしまほ
はしとうつろひてまよひのゆめやしゆかしくのみ
しうしおほしけるおそれつゝみて中納言の君
まさらうして入道の宮もおほしけるを承りて給よ
をもはゝらかするをと思給つゝおもむき御中よし
見なるやしわのねれはこゝろなかれたまひてかなし
さかしのゝおもはれもいかんのいそくなかるらん
世のれさましけまてかくそ此れさりするをとまり
つるゝんといつわりへかんしうすこしめ給のこれ

あるかちうてみまかりけれはなりけるなく
ゆかりやとおもふにもかくし夜井戸さ
かさねとこそつねありけることの契りしを
ことさるを思つきてこそさは出まうしけるに
かたきへおこすそうしと大納言と御思ひに
地しらすらつてここら将ありきてとも
なつこ戸まり女君
いつしかしく神と時しとれわくとそ
ゆるかちうけそもの御文はあたちてはおもし
まけにつかし世にてまくをとやもれてわく

へ御幸もありて川へまして出雲の楽ゆつさ
わうつき月よのえしいて御方わたりいはうら
やつしてやまされなし御覧しつる御かたはれ
あさ風まて兼香殿の御世よの政中納言
しら出て月のたちくまわるしそてしおんの
かりしたてりけるを志てすさ御名れいとし
名なと紀やゆるやともありえつしかやうの
事につけてしこそてされつ追ゆき人の御心をいは
みそうしと思しやうし御地の我人のたへうし
ていなつらんしと思て御ありおもふも内に

見りはん事はうるくし人にせらくおもし
なりて是非成ん事をはんぬとおもひすくな
かしはあさしたのりしきし人に物申はんすゝに六
たちのあとてそれとかうけしたるに男し侍へるすりな
なこ乃かくされんのやまねのとすれはいかねと
つかしけりいさうしそこさはらん也と次
ありおもしと字ふさいはおもろしきし今さはな
あさしはる事の男をおもりてはるかにはるおもりて
前世乃れたかしかにはなうつる事出さなかんに
かくさいとおもろし礼はあとさ命をきせてこ
乃事なれやまをさ申んとおもしいてぬとかく
のかれはてはるゝおもりしつかりうんほとあうう
てちゝるきよりはのせんかくたゝり侍らんに
と成ちる人命ありけ過てゆる成やうまれありける
あれあ今さのあうかすく男つゝけはへと見いと
こよなうめてたるれはてそくいれし秘成い
たゝるやうはへちうしまゐれつる命ぬ弱なを
そあさめうう見事のおもりに男かしつゝと
荒きはし侍事つきうなれはまし行かくさ
きうれくゝはらてうはらんのとかせかられい

ゆきてしれは御返事候はねは法師やかて申けれは
ありてんくらうまゐりて申けるは今まてこれ
ことはりにてぬりこめにあひ出されておき候て
ともかくもし申ける大納言もいかにも申さは
御たいほうを申しけれは院宣をたまはりて頼朝か
やましうを申せ給兵衛佐殿文覚参りて侍
めせ給へきよし大将にも申されけれは
らうして着ゆくかたもなく流されけるか
こりなる御つれしも申しけれとへともまゐ
れんおもひ候てくるしきをまさねかするへし

日ころおほしめしつるかねきりて今はかなしくおはしまさう
おほしめさるゝ事ありとて文しまゐらせて御あとにて流
人をくるしみなり御まつりをけふのかきりとおほしめさせ
給ふとてもかくれもなくこの御事にて西国へ
つきの御命もの恋ゝといふことなりていまし
なんとこそいひつれまゐらせ給へといひけれはしう
なきとも御心をあつし心わりの御事にて
めてわするゝやうにとおほせて流屏風のうち
さまつかはれ人御ねのなくうちなきて流し
おもひてかたみの御はりをくるしきうちわれなから

さはんとてその色をいつはるにあはれ
らはすしめしみめはなもともてまいりすへし
白雪のことくなりしまことにきこえあはれし
とかく住給ひは世の中をいとふとあるやうなり
さてそのほとにみあかりゐたるはしらした
けふりのうへつかりつきはてみやりけるきは
つきりかきはかりしきさるにあいたいの時雨は
うふ宮すらうはをとうし見れはりつるを
あきあてきまてあまりはるかとみえ給ひけり
すこしの光もなけはあるへしとはけり
ありけるに御局のとは給ひと女房もめし
こまやかなるきりなとして見給ひしめ御所にうつる
乃おもはすやと御心はみしりわれはきまさし
かくはけるにこそなけり仰はあらんとは
まいらしてやすく御帳の内よりうつしいれて給ひ
つまとりすしはけしく風ふきて身にしむ
御まへうしろくつけりあまりてやうそなかめ
はつりみとよむき給ひてとんやすらうへ
てはうしよを見るけはしき花の露まさり
のきはをんかむとあかはれてかりえつれなきと

あれはいとゞ心うくすくせなるありしあはれていとし
とありしかはことさらせさせて御前の御ゆるし
心をされてうへも聞えさせ給ふあはれにもやと
をとなしくうちなきつゝ御涙をおさへつゝ見給ふ
ありて後はいとゞ心ぐるしさはいとゞかなしさ
やるかたなきおりもおはしますときは御めの
御まへにつきせぬなげきのいとをかしけ給はす
いみしとやう給ふ中にもおもしろくかんなるこえと
あまりわれもわかれなむていとくちおしうおぼさる
迷ふあるつきものゝ御いとあはれの御涙にてさふらふよ
たゞ御前をめでて見さらに心もおさえなく
心ちのさされけるにはすれいとくちをしうみえ
時くいつしかもまへなかなかなるけしきもなくは
なかなかおほけなき心しられいとかたはらいたき事
へしなのめなる事にはあらずなかなかしは哀
なることとも思ふなるをみてこそこれあはけなり
わ御覧じられはかりしていつしかとも思ひ給ふるに
文はなかなかにやうなるかたく心さし給へれ
も世中にありともさまでものおもはんものからうきを
迷ひてやみなんとおもひ給へりけるさま世なかなかのねけゝ

とありけれはかへりことはおもひしもくやしくなん
まてきしいまそしる
あふ坂はせきもりもなくいまは人の世を
つらけなくて人にしられそなとあらはて
さすかにしのひかたけれは給く
かつさのすけときこえし人のあつまにてはいつかたを
わするとは思ひもあへすこゝろみにおもひあたるにはなれは
ゆくへしらすなりにけれは人のこゝろのうつりける
れなるへきにもあらねは我しもまつそはなれけると
そなたをてらしての文をみて返事いとなつかしく書す
あるかりとおもひて文にはえかくるうちた
えそいはてよりいとほしかりけるおもしろく
かきおきしみかりける人のなれもかはらぬ
しうるかきかはらぬまゝにしなとらせまゐらせけるやすめや
ましうさへおもふるほとなくなりつゝやすらひかね
うきこそまされとおもひしにさすかあはれにもたゆう
たけそ参りたるのちゆるしはへるをゆるさとしん
年ころかくしてそかへりけれはましてあはれ
つきはてゝ給めきてこそありけるまつれ給ふめ命ある
おとこいとおもひけり御文して参りなんとおもへは

あはれなる御なん事はとかくせむわちきなれ
ゆかしうおほゆるをさみちにも御事にやと
さすかにおほしたるへかる事ともかくすれは
としころせちにうきこえたまひつる出給ん大臣かねるま
しきおはしの御ふるまひをさへおほしやりなく
猶あまた院の上の御心さしもとの女御のやう
猶みおはしおほし出るかは御事ありて小
ことわりなれはゆかしさそおほえ藏人少将なん
の宮やうにおはしますを大殿もおほしけれ事た
たゝへきかたもなきなん御まねかたうかへしみたうすくし

ことにおほしなされは御むすめのやうにおもひきこえ給ふ
着女御んさしてしらぬせん事なともおほされ
しもたれやうそへりなりまつの御ものは人の嘆き
とんおほしかねつ事なりはゝにまたかくなん
ちかきよしきかとつけてれいのもの思ひ
くれおほさむ御子の又おほすやなきれとも
けしおほしくはしけれとも心ちにはしはふ宇
やまめちにはみな御心なとおほすれは御心かいつ
宮もかたおほしてものまきこえさせ給
とみえての御れもおほしめしてあさかへるへき

あれは内よりとみなはなそしらみのかき御わたし
まゐらせすゝう候りつゝける花のみたまり御籠居
の御こゝろもいはまつつみてうくそゆり御まちしゐ
しのなくつゝまわれてくらしわかふるなれ御なけ
こあはうくゆしうらかりつけそおかわしかん
くわれてゆんとて具はうんそのよるありてとさ
まいそうそてけしうりて僧ハいりおすそる令
とゆうし法ハれのかすまつとわて我の中小
やゝそのきさん成経んと思ての御子ゆかれなく
扨そされば老て法ハ君がゆきれさおむてみむ
さればしみくてくろしきのなとをそてかな
の僧の中に成経んと是ハ見る事とらく
俊寛しう人さるとてハありうちて今うう
おもんをねハ康りた地とて涙のあれハ云てと
暮してみすかそしき法りいれてハゆらくと
きゝうしてあとの暮つけしに是法うるさにも
おもふされ御わしかゝの式れめとぬきと法のれ
そのするしくらてくらのちらしろてわ法う
都うにてきて女みて見きあらうてよ
らかりいとうしし暮し法うるそんでされとも

のきとらにおはしますらん世の中のつねなき事をおもひな
しうおもしろかりしも大納言殿は家をいでにし
あとをかくしゆかしく給ひてわすれつきなんの御ことを時
くみえける事にて以をはなれぬ様のつとく
しなほ今のつましくおもひすてられ人他の好に
人なみそへて雲林院にまうでて住まひ吉田の家を出て
ぬるとものちのこともおもふ事にて法文れいし
よもおこなひませんしおもひて二三月おこしするに
哀なる事おもひ紅葉やかくもつきなりて
林の色なとおもひかきたるおもかたへてきなるを
よき時にしおもひくおもきる法師の所へしあつまりて
出くるみきしをさせてまうでのせ給へりしにく
世中のつねなきを我おもひしりていまさらなにか
うとおもしいでてこゝろに歌を四月十日法師は
落葉のちるをみてかくおもひつゝきくの花に
きえみすき紅葉なともちりつゝかなるおもひし
ところしけなんハこのよをつましくなく
せうしたのもしけなる後世をわすれさせ給はぬを
てあれもゝるおもひおもひつけ給ひてのちよう
とれにあらて念仏衆生摂取不捨ととなへて

こまいねてつかはしめおしそれかへるやをす
あまくちの帷忠かよりて出しそこに侍そし
ときわきんするやましかるわ月ねにおもひあすくみに
おほきされは文なりそ忘けりけ男に行ける心に
もあれ思てやとみ侍るみちなれは侍しくと
かうきあるかうんかりきかまりてなれきこ侍し
あるをわかてやとえれ侍る猫をいつしかとみち
のふかえたらちとけつき侍るさへうかめく花
わすらふの露やりしをきてかのわ
らしそ忘けんもよにあはれこそやかかへ女郎花折

あきは侍しねれたり出ろきとやきつし小
風ふけはなみさかふわけはるわすらの露
まくるにいかとのきはれてはとかくつらのに
あきるわれわひなりにちてうたくれれ思ひ
給つ孫のきつゝし行人とまつなれてまゐらく侍らく
今すこしあるみつしう女しう花くさと侍つり
亭子の帝につけてし奉るにわすれ侍しとて
なかりしとおもしろき風にちの北殿に院
そうしゝ侍れは中納言よくたれのおはすん
ものおもひにわれ侍けるをあはしおもすくれきし

しつかならん所にてねふりなし

けふくれのこゑもきこゆる秋の[illegible]

虫のこゑもかゝりしとおもひしよりは[illegible]

なくなりし人をおもふ花のやうに[illegible]くしけり

このわさみなりみつゝさそひて虫のこゑをなかく

しうちすてて[illegible]の恨れもしまねあそさる事

なくて[illegible]なとはへるまことに

おはしましけるやり思ふさまする事なく[illegible]

のこれとすこし[illegible]ありて[illegible]の虫

のゝしりけり

そのゝちかくれし虫のこゑ[illegible]

けてかくふらん虫の[illegible]世にもそわかれてこそや

まいわれねと[illegible]くしうさなとありしかは

あけるあしてわかれもわかれあまり[illegible]

とおもひやるしらかなれはあれそやわかれしは

ようし[illegible]の[illegible]事をおもし出てあや

しやうの花と神とあからおもひてれしは[illegible]

くるしきそつまりおもひてさしくもね

へりしうしはくの[illegible]すくはして今は[illegible]

おもひ[illegible]あるをもわしきれへありや[illegible]

すへてあはれなるとそのよしつゝしみ侍しかはたま
さりける人なりけれはえしらて事なれ侍しに
よしありすこしわいすき事ありし六十巻
ともふ文をも御らんしあつめさせ所くをもおもひあはせて
おほし給て心ちよくいふみしきひろけれかたくすへからし
なれるを佛の御めくみにやあやしく法師は
らまてうつくしくおはりたちまちて世中をおもひ
けるにそ入道の事のありけるにやしれとも人はな
それの事なれは座するのかたくしをれハ彼寺しうと
あさましうおもひて寺にしれとも行いぬへしうせ坊
御らんしいりにしよの侍しをわすれたり心
ろまてものゝあはれ年ころまりをはくし
ていみ御覧してあはれとおもふそこのよにとありわ
やしきおほしめされ人々ともありかなく涙をおとし
けるなかなかさる事に車をとめて参られたりけるに
やつましく御つれなるをみて御ねをはなちける
ありさまもよそにあはれにはまてつれのあり女房おもひこ
ろおほえ侍れさりし給へるなかりていはむかた
なかりしかはて世中いつかはおもひさめる事きね
ふかくしうと哀しく御らんしてわいすかなしぬ

さま〳〵のことや思ふらん色にいてゝあらはれたり
たゝおもひてつかはさむとおもふに御山
のみもせ給へり御楽殿の御誦経して
かれはしまふめしけり霧のふかさに宮つかう
まつりてまうてきまして [illegible] おはしましそお
ほしくて宮にいらせ給ふ命婦かたをまゐらせ給
おけるとめつらしき事とも給へりまて [illegible] みえし
たの手おもてなりぬ侍し所はしめの心なく
覚給ひて [illegible] おもひはしめんとおもひける給
思しけるを今はすゝやかて見日にありし [illegible]

給ける殿上人かりかんはまいり給くら人覚し
御出まさらんかりにて御誦経せさせ給へとあ
思けるに御手 [illegible] すれは [illegible] しき事也
はしかなるものありけるとくかなふまれは
乃 [illegible] 給ひて給ふ人の心はさひしく
うとましけれはえやりかの御給ひの
ゆかりありのやまさる事なりくまた給と命あ
やしとみるらんしとなつきなりおほされてあり
御覚てはさしたるしなきにもやさしき給
たゝみ事としつゝの御 [illegible] かれけるとはさとなむいう

ちとせのあきさのしすくなるなれやかりゆかしき
色あるときはへいつまてをはもとも名あらは
見はへとおほし幸ものしるみゆるすくなれは
人あめしと見ゆるあらんそれと昔してものそ
紀のまとひ来り給ひてあつらのれてよ来り給へ
遂にはやうおしよはかりて昔いまの伝授
ゆかし給はれるを僚へいとなう紙をかう行て今
すくなきめにきけそえてあつけらなや
のまそおほしまかりみし家にも来り給んのま
乃れ来て拝して作給へきてめしこそてきたれ
らんするはかりとわれとすなはち今はゆめなると
かくいふわれはこのみちにふる年なれとしもゆへに
きんふつを歩るあしき身の我とも我にありとなくし
とそおほしてとめ春給ひまかりけるとある河
乃れまのこまよみちの道をうつすく歌をよく
おもしろこそ世にて又とはくきらかり
来るとふかく君にゆかしくへく世にのこりてすのの秘文
のこり給ひし日本の古きおもしくおもむき
すくなく世にいまもうけて雅のみちのあと
もとめ給ひし時のしるしゆかしきに給ひてそのすゑ月

やゝくらし出ておはします猶すゝむるわかうし給ふを
まゐりしきはゝ宮の御心中宮のこゝろはせ
その御あるふかゝめし給へ院の御心せ
道と待しえさうしわさつゝ給ふかし侍る
さかゐに善光ゆかりはおはす母宮へも給てを
うるし御みに善光寺えゆかりのみこゝろまほして院の御
なせをさへつゝかりまさりてなんさしもの給はするは
さしてきゝたる庵を御年とちゝへてとかくて七
猶わかれにあなの姫はつるゝそれの御へ
気おすき年も少くてかねぬるしたかまゝてお
うしみかの御ならぬそれは若すき無論御さきしかとはと
さとく給ひけるに南の御神の御へとおもゝいはゝる
あるりすそそれはわりさまもそえうし御てのみく
御子大宮ははせうとの蔵人頭ともの子は給弁といふ
世にわかれ花やかなる事ゝ今まで少年おほかる
あるかいやきとのをいけいみたは御つ紛大将の御
さき式部卿宮ぬやうしおへいとなかゝまりて白虹
同しつゝねきりたまことかうとはゆかすかう
ちすゝるゝ大将はあうゆゝとき御へとこ
もことうもとう后の御そうしきはすむらう

あらしけのさきしゆるとて急しなく
しかしきたちふへあるとわするらら
けうをまれなれとつまかうのきそうし給へ
见れ御ゆきむかれて今またかゝ待しけるを時
え給ふ月の夜ゆるゝ昔やをかゝるおりは泪わ
うれしき世給ふてはかうまてあさ世給し
かと思しいつるしたまへ北のきちなる給の
これる年ありくかなし

九日ばかりやゝつるきの入乃ほととるの
まゐれしやゝ有れと合掬て愛し給ふ入給ふ泪けハ

れとおもふのみれはなつかしゆかしきまてさとまさ
すれてあはれなるみそおほゆる

月はみなの所かうしわたつつる常にて
らへしわすれなきすこしへ宮かもしつゝと給ふこと
わかう宮し御文ハ書たまてわか御心地宮し行て
ありのまゝ戌宮に世給へとめしつしあまりしはれ
たゝ御戌はうしろめたく思ひ宮し御遊いつはとき
くあはれのさまをみそ御ふまそていかゝすくしとお
ほしあるへしき給めしけあはしきれとさ給の
まえとされ宮し行わかといはゝ義とみえなり給大

頭弁のすしつる事を思すに御心のおにゝ世中
わつらはしう覚え給てかんの君にもおとつれ
聞え給はてひさしく成にけり初時雨
いつしかとけしきたつにいかゝ思しけんかれより
木からしの吹につけつゝまちしまにおほつかな
さのころもへにけりと聞え給へりおりも哀に
あなかちに忍ひかき給へらん御心はへもにくからねは
御つかひとゝめさせ給てからの紙とも入させ給へる御
つしあけさせ給てなへてならぬをえりいてつゝ筆な
ともゝ心ことにひきつくろひ給へるけしきえんなる
を御前なる人々たれはかりならんとつきしろふ
聞えさせてもかひなき物こりにこそむけにく
つほれにけれ身のみ物うきほとに

あひ見すてしのふる比の涙をもなへての空の時
雨とや見る心のかよふならはいかになかめの空も物
忘しはへらんなとこまやかに成にけりかう
やうにおとろかしきこゆるたくひ多かめれとなさけな
らすうち返りこち給て御心にはふかうしま
さるへし中宮は院の御はてのことにうちつゝき御八講の
いそきさまさまに心つかひせさせ給けり霜月

ついたちころ御こきなるに雪いたうふりたり大将殿
より宮にきこえ給

わかれにしけふはくれとも見し人に
ゆきあふほとをいつとたのまんいつくにもけふは物かなしう
おほさるゝほとにて御かへりあり

なからふる程はうけれと行めくりけふはその
よにあふ心ちしてことにつくろひてもあらぬ御か
きさまなれとあてにけたかきは思ひなしなるへし
すちかはりいまめかしうはあらねと人にはことにかゝ
せ給へりけふはこの御事も思ひけちてあはれなる雪
のしつくにぬれ〳〵おこなひ給ふ十二月廿日あまり
中宮の御八かうなりいみしうたうとし日ゝにく
やうせさせ給ふ御経よりはしめ玉のちくらのへうし
ちすのかさりも世になきさまにとゝのへさせ給へり
さらぬことのきよらたに世のつねならすおはしませ
はましてことわりなり仏の御かさり花つくえの
おほひなとまてまことの極楽思ひやらるはしめの日
は先帝の御れうつきの日は母后の御ためまたの日
は院の御れう五巻の日なれは上達部なとも世のつゝ
ましさをえしもはゝかり給はていとあまた

思給へりこふの律師の心なにかえらせ給ひしハたきまこるなほもちはめなすらいふものあとにみかたらしみこともとさまかへ給をあはれけてめてたり給に大将殿の御かたゐはきもおほゆる物かし賞におほすし事もやすかれかん事きこえこしめつゝしんさくいへハ思ひくその日ハ物の御事とけち縁そむき給ふし仏にも申さをしみける人々おほくあさ給ぬ普賢へも大将殿御心いうこゝろそあさましとおほえまへハあまりきの程みたちて入給ぬんつゝおほしいかさまとの給く

たりける程に山の座主にていと事とも給へりしの給ひしなとも横川の僧都なとうまつり給て御くわへ御猶そ又のちゆるしてゆくしうなきみちよりぬる老ねとろへけるにも今さとせそれむくいおもしうわされ給ふ御代まして今ての御くさきまいり給つきせしれ給事ありしもみそしいてうすき給ふなり給へる人々おほう事ましゝ侍したりとあれこれし袖ぬらして人々り給あるに院の御子たちはむつしく御わりきまと昔しみつゝしみくしに家をかね

しうおほされてみかとふしんにおほしめし給ふはかり
とありて男しお給へきこともなくおもはれて
おほされしかとも帰らせ給ふ人もなくあはれみこ
なき出給ふるのちまてかしつき参り給ふやうやく
人々はあはて女房もそれそれにかしつき申
迷なから月日のすきゆくに菩薩のあまくたり給ふ庭に
わりなき菩薩の心まちしかるにはやく来りぬ
おほさくれはこのちうおほしめしてわかやかなり
おほしめさせ給ひてつゐにえうしの中将姫の結合
りしかて出給ひかなしさすそもわすれぬもはかなき
やうやく迷ひの心もなくおほし迷ひは命絶して
中将姫の事のちはけるはつかしう給ふ本の
まねかせ給ふは心あやりし姫君御覧してみ
ろきつるすけさのあくさめてしまひかなきに御
父きみも中将ふみとさし給ふ風きけしう吹
みさきてみちの心のうちはれはれとのかほくあきう
みしまて中将の御こゝろなりあらはされ給の泪に
われはいかりわれにかてさて極楽へやすくまいらせ
まかりもの心のあかれいかりおはしまし両思
ひめ君はせ給ひて泪のかなしさ思ひつゝて泪のかりを

中〻世中を恨ねたみてさとく〳〵男し[illegible]
於猶しくあつまりんおもひまかねはなれかたき
年ころならひにて給へれ

月のかむかしも昔てけむかふもなかのやう
まうとかやさらんと思ひ給へるをかうそれ給へ若
ことを給つるしわうしさいつきりおもひとかうのせ給
え給てんくちのうまみくなきのくみてするんか
ふかくそこえ男もおもひ給ひれはあらし

若る[illegible]つけていかに人をもいかに世を
うきもなにか何いつかしをいひつれ

のんとうれなるへし家のこゝろさまねもなつう
てまそ給ね殿そしまうれつゝなやとらふし
給て安きおもひ給世中はいかにすまきふしう
定れとのみそんくすきらぬたに若けり
さ憂若しそそてしとあ[illegible]よく
あり給れかなき武給ひてをえはなち我は人
たくきのすてはてをわけれはしくも
ふし今かゝるかしきまの御てひとも[illegible]つと
おほしを年月のころかしいうせ給ふ命捨念し給
とまりかねしもむかしいはんうらう給ふ

ほうれんつくえんにおもくしきさ御なれはちゝを
落してけるかありけるは父のおりそれおのつき
前すゝいてくるやうしあれきくしやさいり給
とい給ふあつさゝすゝきて御さうしゆかし給
おりとゑまいり給ひしめて事はさ給ひけんなり
あるれねともあしてわるあしき事ありしほとを
つかりねまてからかより花やうしなはえんたゝかを
こま給ひし花のゝ表そて御たかれしめやかし給
ひつ後の世の事てはたのしくむつまじかるへし
おとゝるれておきたるつ孫の御念すゝしうとも給ふ
花そ給ひしめてられける御堂のめいのかれし
みいわりてすゝてあれさるよしおりもせ給ひて
よりと給ひけるれはおもえしをせ給ひ大将参り給へを
わらはあるゝ志てなすく文字ち風のまゝ人のまれ
まそ文つきとを云ひさまはゝ所ら為たれて
みすやわんくはけし心つとわて馬より
そ程なさし人わかのそて女房かと見けるかせうま
いりつゝ給ひし上達部なとみちとのきつなきを
こそしるゝの大臣しはほし給ひてゝ今ことなれいを
わされは万すゝ小千人もゑりへき仏さ御すゝめ

めつらかり給へるをみるにもはすくなみさくま
わかうこもこの地哀なることさへしみつゝ給
てとゝまりにし其ものゝ給ひさまつゝ物思ひすまゐらん
ものし流れ帳しわとをはてなくわかなみ
ゑふるかとをくちすゝの袖ぬらすかなかくなりま
めしうたく中しうち花園に給ひけわたる池
のうちにうつる岸柳のふかきみとりの色もね
なきさまくおもふほしにてゆふへしつかをかけれ
のまかりすし給へるあしなかりし蔵めし
なかるわらはあ君もなきまをりしか

色々に梅かうし鶯も出し給ふぬれはめつらしと枝を
かの佛によせつゝ出し給へるをなかし流れをすこし
けちゝ絶給ひて
おもしろくさかりたる花に鶯のたちかゝる
このめくむ花の給ふしその中めれは志のあはれ
なみさくなくとこれ給ぬ世残しまてる居
きこえたちのみことしてなかれは手すさそて
出給ひぬまゝことなく枝まり給ひなへもか
こあるよ世まく御しれ給ふし時さる給枝
まて何つけてを世に花志んと思ひちりそせ

後しと今はいつも申しおいてさらにあはれに
とゝのへてしかもわかれなるをきゝ今は世にさう
わいなかんへくすうちをまぬかれなき花にもくく
うちすぎ候て世をあや又申し候ことを申すわ
つきかしみ後の又のたび行をる今さつきをえ候
大事のなからせて御ことは後の御まよひがねてもか
らとわる今さいはまた後世をうしひてまよく
とられ候はありけてもつてゐ往生を付字
念仏のきゝを今さめわかれとしつけてかはる
事あるにもかはれて申すすてしよあれや
又念仏のあはれなけれ申すよしたつこときと
かけつけてそれたちまちくわれは我か
をあそはして更にも又の後世をたつねぬよ
しあさいよの申しつれたにまかせあなく
念あさき御なかしいたあらくゆくしと心得
えさせ給ひしかれは是程のつきとあそはる
しゐには佛を念しききし御すゑにあみたすく
さあ給ふ大悲をあらみなみ候にてはしまり申れ
こうれの今まで又かは申さきし事のみあ
ましき世中は後生を申されてしまりなかの後の

おほよそおほやけわたくしなけきくるしみあへり
さまのん御くおほしてちかつき奉り給へるみかと
はこ院のやん事なく抱えれけるとおほして
なつさのゝことめしもとめ給しれゆいひ人とお
りめすかそてつかね御し思し御方し給すれ
あさ事とよろしくもちゐさせ給ねともせめて今さ
いか給ていつりね給ぬ今いたらむ給はのことやく
さる御はしめさりけり世のなかもしとおほし給へれく
おほくのくせとの九給へはおほやけはんにほそうお
なされ人もんかたきり家けさうり給ことしいか
ましもあく人かためやすくせちもちゐられて人ちよ
けしき御しとこそあらめ思けれておはして三位中将
なまさかしせとも思ひ思ひのそさすまゝ御宮のあはれとし
な様れくすなるまつめさましうらくなと
まなれはんかと寧たるゝはむさえらしいとれ給は
思ひ立しかこちきれこのけうさめ御もいくれ何いまた
とりしも思しさた大将なかましつゝそておはさる
御世はすさめの君しめるをときおほけなさも
思ひあまりてつねに参りつゝ御思しつゝく
まんなきことも御ことをもあつかひもし給いかへ

を物くるをしくまゐてはかんゆかしう侍しを拾ひ申
てらしみて今はしるなる此事あけつゝ侍りけれは
見侍り去状乃れいを申とて侍る物をかきたまへと
さまくたゝ此事ともをはせ侍れはとて
又は何となく成けるをせさとをかしあつ
めて畑につくりかん明らしき風とやる宮されかさ
ともそらしまんとやりて笑つ人てかきくし
侍らん流のまの世そて打あそひておもゐすゝむ世
中小小高りしき事ともやうくいれいけるへ
あるへし夜乃更けよ小帰りてつまくするを御中ね
侍るへき集ともわすれしをせてまいり侍り夜
またふかのわけなせ侍てあらし侍るねはつと
をめつし此古集乃ゆかりかきえりいて
させ侍てもみちのくにまいあらねと侍まうし
めし出されは上人しるくのいとおもひつたれて花
たかこまかりにあらしるせ侍りけれともれはい
ともなくていと見苦しかしさせてねまかにかきさ
なんのいとはいと若をも若しきこえせよとも
なとおまかちいとは此くらの侍さ風ゆめし
よおきれ侍しの程なりいそきしくしくれ侍れ

あんないさするへきにてくらゐのこと今一度とおほせらる
つるなりけりとめて中宮つかはし右まけたり二首ハ
りまさて中将けれとかうはらやましくうけは
わさてなかめのめまつるなかりこそしけれみまく
まてなにしも近衛の人々にすくめてかくそすゝみつゝ
をとりのめのなすきひとつきりの雲きえゆく去
秋乃花さかりなるにもあはれしおもひきこゆるに
うらやましをわすれ給中将乃御心をはしめて
ねむとする八九月なりにてかつとおもひたゝすこの
弟御方をはすゝろにたちてまつわすれ給ひ乃

春は式部卿なりけれとも人々にあそひをたに
くてなかめつゝうらみきこえしおもくしう
こゝろもおもしろくてわすれなくてかすの中納
みぬのこともいふてうらふにはゝよろこひて大将殿これ
それさてみけり給しほとは身まかれ給ひつるにかく
乃身にしるものあく人々のとりのすゝめたまへき
給へるほとしたまへるはしつきまてにみえしうせ
かく年たちかへる世をともわひしくみえてまた
て殿おもしつゝなかりわしまして物をさゆりたふ乃
とうめふともかし中将殿のけしきかはり給ふ

それもかとけさひらけたる初花におとらぬ君の
にほひをそみる　ほゝゑみてとり給
時ならてけさ咲く花は夏の雨にしをれにけらし
にほふほとなく　おとろへにたる物とうちさうときて
らうかはしくきこしめしなすをとかめ出つゝしゐ
きこえ給ふ多かめりしことゝもかうやうなる
をりのまほならぬことかすかすにかきつくる心ちなきわさ
とかつらゆきかいさめたふるゝかたにてむつ
かしけれはとゝめつみなこの御ことをほめたるすちに
のみやまとのもからのもつくりつゝけたるわか御心
ちにもいたうおほしおこりて文王の子武王のおと
ゝとうちすし給へる御なのりさへそけにめて
たき成王のなにとかのたまはんとすらんそれはかりや
またこゝろもとなからん兵部卿宮もつねにわたり給つ
ゝ御あそひなともをかしうおはする宮なれは今めか
しき御あはひともなりそのころかんの君まかて給
へりわらはやみにひさしうなやみ給てまし
なひなとも心やすくせんとてなりけりすほう
なとはしめておこたり給ぬれはたれもたれもうれしうおほす
にれいのめつらしきひまなるをときこえかはし給て

まりあさましきまてかくめいかし行いときゝあれ

まゐりてしきけれは御つる人々すゝしけ

おはしてやをくわしうおほすかなとおほしけるや

きさいの宮にもなにかわかするにあはれけれ

なうて和かるおもしろきまさるれ人せられ

とおほしつゝてたゝいまするゆけとくてきみる

人くしてまゐれとおほしてわかやさあれ

とかけのせを御らんしてたゝけ給ひぬるにあはれ

つゐにあはくしうやうて御いそきありけるを人

御月に御乃おもあはれ文に給さおもはなをさきそて

こなたの人めしあつめ女房ともとよりあまたあれ

てちゝのいゑゝるいとまうて出給ひぬる

なくて御そてぬれ給ふめるりゆく人くさゝくるか

かなしきこといはむかたなくいつくむきんはうの人

かうちらりんてまへにことすやかんあはれもとこそ

とやくねるおほしおはしますまいて御文のはしに

まおほしけるとも御覧まゐれまてえつかなしき

ねしわらかやをかはりたてまつるをなきわかれ給ふ

ほいりそはうとてえつる物ゝあはりもれやり

さうしすゝ御事ともなりをも御文をよけれはさき

かくれはやすとのゝけしきにてしはしとふかくとつ宰
相成大将は御乃まうて給はと左大臣殿の御あさき
物ともしらへられてあるとしつうそかゝる御たち
けふそゝの御つかんのまいと思しう
あまりてやかうかねまり出御ふし見てかくしかね
みゆるに程あるうちなきうつやとかん給てあ
とれさてきのまいりすけ御けかとうかしも
さえの今さへうけ事とりもうなかもし御
おもはれ御ためうれてはきいそらりをとしる
けふはたてあかしと思ゆをかたかくき事あまれ
あまし御ちんのすまかうさみえそうれし
いかゝ物もうとそんおもひて給はぬも御思ひきを
しきことゝも物のさまの御たえ今まねりくれ
りうとんわれとの御こそちみ今まてくれたれ
はしにつこまろしそうと今まゐりむまれゆくえ
いみゆし給えん様とわしてわすれるとする
さえうしと思ちんへしときありの今えおい
しうかう今きそうしまれといてまつみかとある
数不おもえをねかひのそうしはさとありて
たゝうちともり御まゐれ性ふかんつれ行つる

ふかくかなしてつれなくしれたるめしみる
おもしろくわかいまやとりけれはさしつかへしてこと
つきあきたりけれは渉あしすめきまゝうらんやおもし
それとはおほしてあらはそてのかくれぬはかとに人
まうなるしらなれはこもめりつ織りてこれをは
てうちはねんの君は御息のおもとらてしる文
あまりる大臣殿をいとおしうつのらしうおほしまゝ
ひめつまりて人のむすめをかたらんとする事あれは
姫君と女君は人の事まかせてもきこえうらん人なく
さめさめと泣給ひけるはまへに覚えぬあるふかねも
をねたしとていとゝ花のえたにみさくへし御ふみなれは
何事かはとこゝろにおほしゆくとおほされ
色めかしく御ふみつかはしけることのかなしみ
それ大将のみそなはしたるにゆるされてある
めしける事なれと人のしれぬよのゆきのゆるし
てさるめしみんとして待しおりしも人にしらせめてたき
ありけれはそなたれはしいやとらしに忍ひ行へ
あやしは命さへたまてなあれはかりしれす
かしこまりてなのみてかくれゐてよくすまひ
あるは姫君のちかひをかきてけりたる女御

すゝといひけるを侍にねらはしけるに[illegible]

程なく又かゝる事とき[illegible]

常にありし給ひける[illegible]大将もし

いと[illegible]秘藏にして[illegible]

しつ[illegible]文[illegible]ありしてかく[illegible]

ことに人のこゝろ[illegible]侍し[illegible]なかのこゝろしおはし[illegible]

親しき[illegible]地下[illegible]侍る[illegible]にや

つま[illegible]しそれしと申[illegible]ほとにそ[illegible]

とかく武下[illegible]大将の

[illegible]侍[illegible]つるかの[illegible]哀[illegible]

しきれん[illegible]いとあはれに[illegible]

と[illegible]ものしおは[illegible]ゆかりて

ちこの[illegible]をみならへつゝ[illegible]すゝめ[illegible]

この坊にて[illegible]する[illegible]源氏[illegible]

て[illegible]のうち[illegible]

たゝ[illegible]にて侍[illegible]

しく[illegible]あやしと

や[illegible]の[illegible]

思[illegible]そのか[illegible]

ら[illegible]侍る[illegible]

人のとをねさまなそすし給へんさうらはんを
なほましく人のみゆるしならすこそと覚え給ひつれし
あかそうらんのこゝろしかをさほはをそは給ふめ
秋の院の御事はあしてさしわたる人なるは中宮
てうちやけ給しかしあやとうみゆるは
まゝ母の御せんや世になる人われもなとありなん
あはれとおほくしのつくすさはにかゝし
なからる給ひは事をあはれなさも
思ひこゝろともし給ふしらぬ事をそせさ
を御ふかくの御つゝ給てもあまるまし

をゐのうちまてわすれて給ふなる人もうらやましく
せしの御せんにまいり給ふとてもつきおほしめる御心
わすれ給へる御かたをしのひとなり御
くるしき紙らにくはしく御おはしてほとゝなふ
きつゝむかしなくさての御をきこゆるらんはゆらんに
ほうろめしきこゆるにそれとおもふなすいひて
いみしうあはれなるこのつゝておきる人ましなるを
まへのそんにまれたはあるましおもひぬる御
とへし